

学生街を歩く ⑥

◆香川大学・幸町から常磐町へ
(高松市)

読売新聞記者 中西 茂



右手が「吾里丸」。この後、外に長い行列ができた。左手奥が幸町キャンパス

讃岐と言えばうどんである。香川大学の本部がある幸町キャンパス近くにもうどん屋は点在する。大学院生の片山祐輔さんに、学生が集まる店を尋ねると、「吾里丸」「さか枝」「竹清」の名前があがった。

キャンパスと目と鼻の先の「吾里丸」は学生御用達だ。

昼前から学生客が吸い込まれていき、外に長い行列ができた。提携する自動車学校に申し込めば一か月間、無料でうどんが食べられ、店内に「香大生限定、洗い物一時間でおなかいっぱいになります」と張り紙も見つけた。

「さか枝」は大学から少し離れた県庁裏の有名店だ。客層は幅広

く、やはり大にぎわい。二軒はしごとをしても五〇〇円玉一枚で足りることに驚く。讃岐では、朝食でうどん屋に寄る人も多いため閉店時刻も早い。お昼を過ぎた「竹清」はすでに閉店して立ち寄りなかつた。高松は観光客でも二四時間一〇〇円で自転車借りられる。その自転車でもどん店巡りも悪くない。

さて、地方都市に学生街は存在しうるのか。今回はそんな視点で高松を訪れた。香川大は昨年三月、大学の最寄り駅である高松琴平電鉄(ことでん)瓦町駅前にある高松常磐町商店街に、サテライトキャンパス「ミッドプラザ」を設けた。工学部や経済学部がゼミなどに使っている。最寄り駅と言っても一・五キロほどの離れ、一本道があるわけでも、直通のバス路線があるわけでもない。間には官庁や大通りもある。だが、都市計画が専門である香川大工学部の土井健司教授(五〇)らは、幸町から瓦町駅前までを学生街ととらえ、サテライト開設前から商店街の活性化に知恵を絞る。

瓦町はことでのんターミナル駅で、常磐町はかつて市内で指折りの繁華街だったが、ダイエーの撤退などを契機にシャッター通りと化した。最近、音楽



「ミッド・プラザ」での授業



香川大のサテライト「ミッド・プラザ」。高校生が訪れることも意識している

だけでなく、同じ建物内に市が設けた音楽情報発信基地「プリスク」と一体になって高校生も呼び込もうとしている。

土井研究室では、香川大学が、ことでのICカード乗車券IruCa（イルカ）と連動した学生証を発行したのに合わせ、昨年、学生の消費行動を分析し、学生が街に出るきっかけを作ろうと試みた。しかし逆に、いかに学生たちが街に出ないかが証明されてしまったという。今年三月からは、ツイッターを使った商店街のPRも試みている。

研究員の中野裕介さん（三五）らの取り組みで、学生も指導役になって商店街の約三〇店舗がアカウントを取得。うち一〇店舗はランチ情報を発信する。ツイッターを有効に活用する店はまだ限られているが、「これからも利用頻度を高めていきたい」と中野さん。新たにイベントでの動画配信も始めた。

イベントを開いたり、ローカルFM局を呼び込んだりして、若者が集まる街をめざしている。「ミッドプラザ」も、大学生が学ぶ場として使う



「学生が街にかかわってくれるのは大歓迎だ」という野澤さん（一番左）

「ツイッターは、ひと言つぶやくのに、こんなんでえんかいなと、迷ってしまふ」と高松常磐町商店街理事長の野澤道雄さん（五八）。一方で、七月に学生サークルが中心になって開いた商店街の縁日が好評だったこともあって、「学生を街にほうりこんでもらい、学園祭を商店街と一緒にやるのもいい」と歓迎する。「商店街の方に迷惑をかけることもあると思うが、街に学生を育ててもらいたい」と土井教授。「背中を押してくれる人がほしい」と工学部の学生も言う。

この夏から秋にかけて、高松市と瀬戸内海の七つの島を舞台に開かれた瀬戸内国際芸術祭では、期間中、ほぼ毎日、観光客に身近な情報を提供する「翌朝新聞」が発行され、香川大生がその中心になった。

実は片山さんもその一人だ。今後は、常磐町のような商店街の情報発信でも、彼らのように活動的な学生に期待が集まる。

地方の大学と地元商店街の活性化は、切ってもきれない関係にある。学生が街とかかわるために、大学あげて背中を押す取り組みが求められているようだ。